恋をしたカエル

渡邉麗加

濃く淡く、今年も又、うすむらさきのあじさいが門先に咲き始めた。
そのあじあさいの下では、駐車場をこわして私の手で作りあげた四畳位の池に
何百匹ものメダカが泳いでいた。
赤、青、白…まるでフランス国旗がひらめいているように美しい
「五分仕事して、三十分メダカを見ている」と事務員さんが言った。
そう。 私は年がら年中たわしを持って池の汚れを掃除していたのである。
唯、澄んだ水の中を泳ぐメダカを見ていたいばかりに。
そんな夜、あじさいの中で突然一匹のカエルが鳴き出した。
一番恐れていたことが起きたのである。
カエルはメダカを食べるのだ。
一晩で全部食べられてしまうと聞いたこともある。
私は孫達を呼び出すと、懐中電灯であじさいの中のカエルを探しはじめた。
電灯に照らし出されたあじさいの葉群は、暗闇の中で重層の建物のようにみえた。
その重層の建物の中でカエルは、シンと鳴き止んだままである。
次に鳴き出すまで十分近く息をつめて待っただろうか？
― ゲコ、ゲコ！ （懐中電灯） ― パッ！ ― ピタッと（暗闇が迫る）。
こうして私達とカエルの息のころし合いが続く。
いや、息をころしているのは私丈で
子供達はもう家へ帰るという。
その時私はひらめいた。
昔、学校で習ったのだ。
「貝殻をこすり合わせるとカエルの声になる」ということを。
すぐ家の中へかけこむと、小さなアサリの味噌汁の貝殻をゴミ箱の中から拾い上げた。
“あった！ あった！ さあ決戦だ！”
私は帰りかける子供達をそっとあじさいの陰にかがませると、

二枚の貝殻をこすり合わせた。
…　ゲコ　…　ゲコ、ゲコ　…

ああ、おそるおそる、私の手の中のかえるが、かわいい声で鳴きはじめたではないか。

息をつめること数十秒…　ゲコ、ゲコ、ゲコ…

ついにあじさいのカエルが鳴き出したのである。

「ああお前達。このかえるは恋をしたんだよ。
　ばあちゃんの手のひらのカエルをメスだと思って恋の歌を歌っているんだよ。

“僕はここにいるよ。僕は君が好きなんだよ。
　早く出てきておくれ”って鳴いているんだよ。」

私は幼い子供達にカエルの恋の物語を熱っぽく語りはじめた。
そして懐中電灯で居所をつきとめた三センチ前後の黒っぽいヤセかえるは
大事に手のひらに包むと、近くの田んぼに放してやったのである。

田植えを終えたばかりの早苗田はおぼろな月が白くかかり、
あたり一面天まで届くカエルの声でわき返るようだった。

その後しばらく、いつわりの恋だと知らず人間の罠にかかったこのカエルが不憫(ふびん)で、
私は懺悔(ざんげ)の思いを消すことができないでいた。

―　あることを聞くまでは　―　。

このカエルの恋の物語りを切実に語り続ける私に、その人は言ったのである。

「麗加さん、それは恋ではないよ。カエルはね、敵だと思って鳴いたんだよ。
　命がけで応戦してきたんだよ!」

……　ハッ?　……

　果たして
　　どちらが本当なのでしょうか?

（　誰か教えて下さいませ…　）